

ハワイ人キリスト教徒へのインタビュー

1990年代中頃は、文化復興運動はその名前から「復興」の二文字を外しても良いと思われるほど社会に根付き、主権回復運動も1993年のハワイ王朝転覆100周年記念行事「オニパア」を経てますます勢いを増していた。このような文化的・政治的状况において、ハワイ文化やハワイ人のアイデンティティはしばしば議論的となり、コロニアリズムの遺産ともいえるキリスト教を信仰するハワイ人は、アンビバレントな立場に立たされることになった。そのような状況で、ハワイ人キリスト教徒が自らの信仰とアイデンティティをどのように捉えているのかを考えるために、私は1994年から96年にかけて、会衆派ハワイ人教会や独立系ハワイ人教会の牧師や信徒、約30名にインタビューを行った。

インタビューの中心的なテーマは、ハワイの伝統文化とキリスト教信仰との関係を問うものであり、文化復興や主権運動などのトピックも織り交ぜて、「ハワイ人であること」と「キリスト教徒であること」について、彼らにその思いを語ってもらった。ここでは、インタビューの中で、彼らがアウマクア（祖先神）の話題に触れた部分から、アウマクアに対する彼らのスタンスが伺い知れる部分を紹介したい。ここでの狙いは、彼らの語りを通して、その多様なアウマクアとの関わり方の一端を理解することにある。語りの分析やアウマクアについての不思議な経験談の紹介は別稿に譲りたい。

中堅の男性牧師

私はアウマクアは守護天使のようなものと見なしている。私の家族のアウマクアはマノー、サメだ。プエオ、フクロウが家族のもう一つの系統の、父方のアウマクアだ。そして、私はこれらのアウマクアを守護天使と見なすように育てられてきた。つまり、聖典に書かれているように、神は、空の鳥を、海の魚を私たちへの使者として再利用されたのだ。私は彼らを天使、使者だと見なしている。確かに考えなければならない違いはある。もし、アウマクア崇拜の儀式を行えば、それはキリスト教の教えの全てに反することになる。でも、アウマクアと私たちの関わり方について見てみれば、それは私たちの一部でもあることが分かる。いいかい、自分の祖先が誰であるかを、自分のアウマクアが何であるかを知っていれば、祖先やアウマクアを敬うのはごく自然なことなんだ…

神学的に言って、私が教会の信徒に「古来のアウマクア儀式を行い、なおかつ教会に礼拝に来てOKだ。」とは言えない。なぜなら、聖書は異なる二つの神に仕えることができないと教えているのだから。でも、私が言いたいのは、私たちの家族がアウマクアを持っていたことは否定できないということだ。私も、私の祖父もそれを育んできた。それは私たちの一部だったんだ。「それを崇拜してはいけない、なぜなら君は今やキリスト教徒なんだから。」と言う人がいる。でも、そうじゃないんだ。それは私たちの一部分で、オキ（切る）することはできない。「私たちはもうアウマクアを尊敬しない。そのような過去に拘る必要はない。」と言う人もいるだろう。言いたい人には言わせておけばいい。でも、アウマクアはいる

んだ。いるんだよ！それは私たちの一部で、私たちの中にある、私たちの文化の一部だ。それは生活の一部なんだ。でも、今や、私たちはキリスト教徒で、キリスト教の神に仕える身である。私たちは、これら過去のものがキリスト教の神を理解する手助けをしてくれると考えている。でも、葛藤が存在するのは確かだ。私はそれが矛盾だとは思わないけれど。

年配の男性牧師

アウマクアは、ハワイの宗教の異教的部分だ。それは偶像崇拜と結びついていて、奇妙な形をした岩だったり、海面から突き出た箱形の岩の先端だったり、何かを連想させる形をした岩で、それにマナ（超自然的な力）を注ぎ込み、必要な時にそこからマナを引き出す。論理的に考えてみても、それは単なるくだらないものにすぎない。私は、子供の頃に、叔父のアウマクアにそれとは知らずに座っていたことがある。彼は激怒して、妻から祖母から家族全員を集めて、子供たちにあのアウマクアに近寄らせるな、上に乗ったりさせるなど言い渡した。それはとても美しい岩で、アシカのような形をした大きな岩だった。そしてとてもひんやりしていた。その日はとても暑い日で、私はその上に乗り、それを抱いていたのさ。とても冷たかったからね。それを見つけた叔父はすっかり逆上してしまっただけだ。でも私はそれが彼のアウマクアだなんて知らなかったんだし、いったい誰がそんなことを気にするっていうんだい。

年配の女性信徒

この教会のハワイ人信徒は、天使について話したりしない。天使についての歌を歌うことはあるけれど、天使について話したりはしないの。そういう話は、どちらかと言えばカトリックの話題になるわ。でも、私は、アウマクアは天使だと思う。それが私の考え方かしら。私はお祈りをする時、とってもハワイ的なやり方ですよ。全能の神、ケアマナロアの名を呼び、私のアウマクアの名前を呼び、私のナー・クープナ、祖先の名を呼ぶの。そして、その三者に同時に感謝するのよ。私は、自分が死ぬ時、この世を去る時になったら、あなたに全てを話すことができるわ。私がどこに行くのか誰も分からないけれど。でも、私たちハワイ人はね、なかなか本当のことを話したがないのよ。

中堅の男性牧師

若者たちはハワイの文化について学校で習うのさ。公立学校の4年生ぐらいになるとハワイアナ（ハワイの歴史文化）の授業があって、ハワイアナについて学ぶことになっている。授業で「君たちハワイ人は、アウマクアを持っている。最も多いのがサメ、それからフクロウ。」って、教わったりする。そうやって学校で教わっているのさ。こういうことを始めたのは十年ぐらい前からだと思う。学校でハワイアナの授業が必修になって、ハワイの文化について学ぶようになったのは。子供に尋ねられれば答える親もいるだろう。でも、親がUCC（キリスト合同教会）の教会で育ったキリスト教徒なら、たとえアウマクアについて知っていたとしても知らないし答えるんじゃないのかな。本当に何も知らなくて答えられない場合もあるだろうけれど。でも、親が教えてくれないのなら、祖父母に聞いたり、キリスト教徒

でない叔父や伯母がいれば、彼らに聞けば教えてくれるかもしれない。人は本当に知りたいことがあるのなら、何とかしてその答えを持っている人を探し出すものさ。

年配の男性牧師

アウマクアの類を信じるのは人間の性だ。人間にとって極めて自然なことだ。でも、いったんキリスト教徒になったのなら、「カメが私のアウマクアです。」なんて決して言わないものだ。「カメはかつて私たちのアウマクアでした。」って言うべきなんだ。まあ、それは私の両親のアウマクアだったんだけど。だから、キリスト教徒なら「サメは私のアウマクアです。」とは言わない。私の妹がこんなことを言っていたことがある。「なんでサメが私のアウマクアなのよ。奴は私を食べてしまうわ。そしたら、私は食物連鎖の一部になっちゃうね。馬鹿な話だわ。」ってね。彼女は「私はそんなことは気にしない。そんな話に付き合っていない。」って言っていたよ。確かに「私たちはかつて、私の両親は、アウマクアは、」と話をしたがる人はいる。でも、全知全能のただ一つの神を選んだのだから、そちらとの関係は失ってしまったのだ。彼こそが私たちを全てのことから守ってくれる方なのだから。

中堅の女性牧師

あの警告を発してくれたフクロウのことを考えると、私はあれは私の守護天使で、神から使わされた使者だと信じることができる。いい？私との接点はアウマクアそれ自体にはないの。それはこちらにやって来て何か自分の仕事をする気味の悪い小さな神様なんかではないの。アウマクアは神と繋がっているのよ。それはちょうど人々が天使について今日語っているように。人は異なる幻や天使を見る。私は子供の頃でさえ、神が私に語りかけ、私を見守ってくれていることを心の底から信じていたわ…

人が言うように、私たちはアウマクアを崇拝しているわけではないのよ。部外者は「崇拝」という言葉をとっても間違った意味で用いるの。私たちは、神からもたらされたあらゆるものに対して、畏敬と尊敬の念を持っているわ。それがたとえ石ころであっても。なぜなら、それは神からもたらされたものだから。だから、神と関連づけずにアウマクアを天使として認めるなんてことはありえない。そんなことは絶対にありえないのよ。だから、ハワイ人であろうとなかろうと、人が私たちとアウマクアの間を異教の神との関係と捉えたり、私たちがアウマクアを崇拝していると見なしたり、そういうものだと思ったりするのは、無知以外の何ものでもないのよ。人は自分が魅惑されたいと思うことだけ拾い上げて、それをしっかりとつかみ、他人に手渡すの。10人で輪を作って、伝言ゲームをやれば、初めにあなたの発した言葉が回り回って自分のところに戻ってきた時、初めと全く同じなんてことがほとんどないように、そんな感じでアウマクアについての話も伝わっていくわけね。

年配の女性信徒

昔は、人々はそれらの面倒を見ていたのね。でも、世代が変わるごとに新しいやり方が生まれるでしょ。そしてキリスト教について学んだら、さあ古いものは捨てて、神が創造したものについてもっと学びましょう、ということになるでしょ。そう

して、これら古いものは、文化的なものとして、単なる伝統として放置される。私の場合、母親の家系のそれは、虹、アーヌエヌエで、父親の家系のそれはナイアとマノーだった。私の夫も、マノーとナイア、ナイアはイルカのことね、その系統だったの。小さい頃、私は親にそれについて尋ねたことがあった。だって、その話をたくさん聞くものだから。初めは、彼らはそれについて話したがらなかったわ。話してくれたのは、私の祖母。彼女がまず語ったのは、私たちは今日キリスト教徒であるということ。そして、虹は神からの贈り物で、神は虹をサインとして用いたということ。私たちはゴモラとソドムの二つの都市の物語を読んだわ。そこに住む人々は大変悪かったの、神が虹を空にかけて街を平安にしたの。それ以来、虹を見れば人は平安であると感じるのよ…

子供たちは、この種の質問をすることがある。なぜなら、学校で教わるからね。クプナ（年配者）が学校に来て、そのことについて話すでしょ。そして、子供たちは家に帰って母親に聞くわけね。「アウマクアって何？」って。「それは守護天使みたいなものよ。」「それってどんなの？」「ある人はフクロウ、ある人はサメ、またある人は石、いろいろなものがあるわ。トカゲや芋虫や。」こんな感じで答えるのよ。確かに、かつてはそういうものが必要だったと思う。昔の人たちは賢かったから、そういうものを持っていたのだと思う。でも、今は私たちは近代化されて、キリスト教徒でしょ。私たちは、全てのものが神に由来することを信じている。そのような小さな神々ではなくて、全知全能の神に。なぜなら、彼が地球上のあらゆるものを創造したのだから。

中堅の男性牧師

私もアウマクアには敬意を払っている。これから話すことは、ふだん教会の信徒に話すようなことではないので、言葉を選んで話さなければならない。私の家族のアウマクアは、祖母の家系はペレ（火山の女神）、それとは別の系統はプエオで、私はどちらも尊重している。崇拝したりはしないが、私はペレとプエオのどちらに対しても大きなアロハと尊敬の念を持っているんだ。子供の頃、プエオに出会った時、とても不思議なことが起こった経験もある。でも、アウマクアについて何も知らない人もいるし、知っていても君にはその話をしない人もいるだろう。それは残念なことではある。なぜなら、多くのことを知っているのに何も語ってくれないのだから。でも、それには理由があるんだ。彼らが君のように尋ねてくる人に何か話をする時、その話は誤って理解され、間違った使い方をされてしまうことが往々にしてあるのさ。私自身も注意しなければならないと考える時がある。人は簡単に誤解するからね。私たちはまだ学びの途中にあるのだと思う。私は教会の信徒に対してはセンセイ（先生）であり、彼らが信仰について学び、ハワイの文化について学び直す手助けをしなければならない。文化と信仰は一つになれること、文化と信仰は互いに相手を排除するのではなく、互いに相手をより豊かなものにするために一緒になれること、それらのことを分かってもらえるよう私は努力しているんだ。それは、カフ（牧師）としての私の勤めの一つでもある。